

不育症におけるプロテイン S 比活性検査の有用性

◎石川 美紀¹⁾、堺 利枝¹⁾、杉 俊隆¹⁾
杉ウイメンズクリニック不育症研究所¹⁾

【はじめに】

不育症とは流死産を繰り返す疾患であり、その原因は多岐に渡っている。その為「不育症管理に関する提言 2021」において様々な検査が記載されている。選択的検査の一つとしてプロテイン S 測定が挙げられており、この中にはプロテイン S 徳島の推測に有用とされる比活性測定も含まれている。血栓性素因は妊娠中の胎盤血栓形成の要因となりうるため、不育症のリスクファクターである可能性が示唆されている。今回、不育症におけるプロテイン S 比活性の有用性を確認するため、当院受診者の比活性測定をシノテストサイエンス・ラボ (SSL) へ外注し、陽性率などの検討を行った。

【検体と方法】

当院を受診した患者のうち、反復初期流産患者 324 名、中期以降流死産患者 196 名、流死産歴のない不妊患者 650 名のプロテイン S 比活性を患者の同意を得て SSL に測定依頼した。プロテイン S 比活性陽性の患者に対しては更に同意を得てプロテイン S 徳島の遺伝子検査を行った。その後、

各群の比活性陽性率、プロテイン S 徳島陽性率とその有意差を求めた。

【結果及び考察】

プロテイン S 比活性陽性患者は反復初期流産群 324 名中 8 名 (2.47%)、中期以降流死産群 196 名中 11 名 (5.61%)、不妊群 650 名中 10 名 (1.54%) であり、そのうちプロテイン S 徳島陽性患者はそれぞれ 6 名 (1.85%)、10 名 (5.10%)、8 名 (1.23%) であった。

正常日本人のプロテイン S 徳島の頻度は 1.3~1.8%との報告があり、中期以降流死産群において有意に高い頻度となった。

このことから、プロテイン S 徳島は中期以降の流死産に関連している可能性があり、これを簡便に発見できるプロテイン S 比活性検査は不育症の診断と治療において有用であると考えられる。

連絡先：杉ウイメンズクリニック不育症研究所

070-5027-2211